九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

# 感受性と自己認識（2）『日記』から『アンリ・ブリュラールの生涯』まで

高木，信宏

https://doi.org/10.15017/10005

出版情報：Stella. 18, pp.83-106, 1999-06-10. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン：
権利関係：

# 感受性と自己認識（2）

## ——『日記』から『アンリ・ブリュラールの生涯』まで——

髙　木　信　宏

スタンダールは「自分とはどんな人間か」という自己検討を生涯をつうじて自らに課した作家である。人間や社会風俗の観察がこの中心的な関心の圏外でなされたことはなかったし，多くの文学的創作でさえ例外ではないように思われる。彼の問いかけは，個人の「幸福」の追求と文学者としての探究が不可分であるような場で絶えず発せられてきたのである。本稿は主として『日記』『エゴチスムの回想』『アンリ・ブリュラールの生涯』の考察によって，作家の自己認識の軌跡を「感受性」という主題に焦点を絞って浮きあがらせる試みである。あらかじめことわっておくと，スタンダールが自身の「感受性」をどのように認識し，それを表現しているのかを検討するものであり，「感受性」そのものの変化・変遷を対象とするものではない[1)]。

## 1

スタンダールの『日記』が始まるのは，1801年4月18日，彼がまだ18才のときである。以後この習慣は絶えることなくつづけられたのだが，まず記述の形態から見て2種に大別できる。専用の手帖に書かれた，いわば「念入りに綴られた日記」は，1813年を境に断続的なものとなっていく。同時期に手近な蔵書への書き込みというかたちでの私的メモがあらわれ，1818年以後，前者は後者に完全にとってかわられる。プレイアッド版の序文でヴィクトル・デル・リットはこの変化の背景に1811年から1812年にかけての〈ベーリスム〉の獲得を指摘している[2)]。つまり，作家による自己探究のひとつの到達点，あるいは発展段階をこの時期に認めることができるのである。では，「念入りに綴られた日記」において，スタンダールは自己の感受性についてどのような認

識を示していたのであろうか。

「これから日々自分の生活の歴史を書いていこうと企てている」[I, 3] という記述ではじまる『日記』は，日常の出来事の記録からさまざまな認識の手段へと時をへずに性質を変えるが，核をなす対象は彼自身の自己である。まず注目したいのは1804年11月21日付の自己改革が語られる省察である。後世の評価に耐えうる劇作家となるために自身の趣味を「脱アルプ化」「脱ガニョン化」するという目標につづいて，「デステュット，タキトゥス，ジュネーヴのプレヴォ，ランスランを読むことによって，わたしの判断力を脱ルソー化 (dérousseauiser) すること」[I, 152] と記されている。この造語はスタンダールにとってジャン＝ジャック・ルソーの感化がいかに大きいものであったのかを端的に示すものだ。もちろんルソーの影響は文学的な次元にとどまるまい。グルノーブルでの『新エロイーズ』の読書が少年期の感情教育において果たした重要な役割については，『アンリ・ブリュラールの生涯』のなかの証言からスタンダール研究者の斉しく認めるところであろう。ところで作家は1803年6月24日から翌年3月20日にかけてグルノーブルと父の別荘のあるクレに滞在しているが，とりわけクレ滞在中になされた『新エロイーズ』の読書もまた12才頃の原体験に劣らず，作家の自己認識の軌跡を把握するためには無視できないのではあるまいか。グルノーブル到着後まもない6月28日，彼はさっそく友人エドゥアール・ムーニエにつぎのように書いている——

> さようなら。そういうわけでグルノーブルに来たまえ。一緒に山々をかけまわったり，遊んだり，狩りをしたりしよう。僕はといえば，不幸なカルデーニオのように岩々の合間をさまよいに出かけている。じつは，この地方は，僕を魅了し，自分の魂にまだ残っているロマネスクなものに調和するんだ。ほんとうにジュリ・デタンジュのような女性がまだ存在するとしたら，この高くそびえる山々と魅力的な空の間で，彼女への愛のために死んでしまうように感じる。[3)]

当時のスタンダールは，前年グルノーブルで知りあったエドゥアールの姉ヴィクトリーヌに恋をしていた。かかるばあいの彼の典型的な行動を考えると[4)]，文面にあらわなロマンチスムには彼女への恋心が間接的に投影されていると考えられよう。「ジュリ・デタンジュ」の下にヴィクトリーヌの名を読むならば，彼の「激しい恋 amour violent」[I, 180] の性質が『新エロイーズ』の読書

で感化された「ロマネスク」な想像力におおいに関係があると推測される。場所をクレに移すや，彼はますます『新エロイーズ』の世界へ没入していく。1803年12月15日付エドゥアール宛の書簡——

> 3カ月以来，僕はひどく孤独に自分の時間を過ごしている。パリではすべてが才気のためにあり，心のためにはなにもなかったが，そこから出てみると，このコントラストが僕には気に入った。奇妙なのは，おおいに感受性をはたらかせた結果（à force de la sensibilité），かえって自分が家族のなかで冷淡な男とみなされるようになったことだ。彼らは，僕が一日中狩りをしていたのを，家族に退屈したためだと思いこみ，そして彼らの疑いは，僕が藁葺きの廃屋に読書に行くのに気づいたときに大きくなったのだ。まさにそこは『新エロイーズ』を読むのにうってつけの場所だと思う。だから，かつて『新エロイーズ』がこれほど魅力的に思えたことはなかった。[5)]

この「かつてない」読書の充溢感の背景としては，スタンダールのおかれた状況が，孤独や周囲の無理解などといったメーユリでのサン＝プルー的主題の変奏である点も無視できないが[6)]，クレの地が少年期の読書の歓喜に結びついた特権的な思い出の場所であることも大いにかかわっていよう。しかしながら，20歳の読書体験の重要性はルソー的な世界への同一化という点だけではなく，その影響にたいする客観的な認識の獲得に存するのではあるまいか。翌1804年4月9日，スタンダールは『日記』につぎのように記している——

> わたしは，自分がこの前の滞在のときより理性的であったと思う。したがってわたしはもっと幸福になるだろう。これはGr〔グルノーブル〕でえた経験のおかげであり，わたしは人間を人間のなかに見，もはや書物のなかに見なかった。わたしが魂と精神（頭脳）を区別したことは，わたしにとっても劇詩人としてさえも有益であろう。[I, 58]

スタンダールはグルノーブルからパリへの帰途，同年3月26日から4月2日にかけてジュネーヴに滞在している。したがって「この前の滞在」とあるのは『アンリ・ブリュラールの生涯』第42章で語られる，1800年5月のジュネーヴ滞在を指すと考えられよう——「ジュネーブに着いたとき，わたしは『新エロイーズ』に夢中であった。まず訪ねたのはJ-J・ルソーが1712年に生まれた古い家だ」[II, 933]。文脈から考えてクレでの読書体験後に，スタンダール

に大きな心境の変化があったのはまちがいない。だが，「より理性的であった」ということばは，ルソーにたいする心酔からの完全な覚醒ないし幻滅を意味するのではなく，自身の「魂」へのその影響の深さを冷静に認知しえたという謂いではなかろうか。

このことをさらに裏づけるのは，その前後の『書簡集』や『日記』『文学日記』におけるルソーにかんする言及の質的な変化である[7]。それ以前の代表的な評価を見てみると，「このうえなく美しい魂ともっとも偉大な才能」[8] といった称賛にしても，「ジャン＝ジャックは誠実な人間ではないのか，それとも激しい感受性のために共和主義的なジャンルでは真の徳にまで高まれないのだ」[9] という批判にしても，いずれにせよ文学的・道徳的な次元に属すもので，自らへの影響を意識したうえでの発言とはいえない。しかも「この情熱〔完全な恋愛〕の最高の画家〔ルソー〕は，わたしほどにはそれを強く感じていなかった」[10] と自己の内的優越が語られている点で，まだ自身の精神的な負債を自覚してはいなかったように思われる。1802年のルソーの著作の再読にしても，もっぱら劇作家修行という動機のもとになされたのではないだろうか。ちなみに，1803年までの『日記』ではルソー，『新エロイーズ』ともに言及は見られないのである。

他方，クレおよびグルノーブルに滞在する直前の1803年6月5日，スタンダールはエドゥアールに宛てて「それに今や反省すべきときだ。僕は20才を過ぎた。多くの事柄について原則をつくりあげねばならない」[11] と書いている。この決意に呼応するように，翌1804年4月，滞在直後の『文学日記』にはつぎのような興味ぶかい記述があらわれる――

> H〔アンリ〕。わたしは自分の魂のスタイルをクセノフォンとジャン＝ジャックの率直さにもとづいて，精神（頭脳）のスタイルをボシュエ，パスカル，モンテスキューにもとづいて，つくりあげねばならないと感じている。これがわたしの好きな人々である。[12]

自己の認識と形成という文脈においてルソーの存在が意識された省察としては最初のものであろう[13]。前年にはルソーにたいする自身の内的優越を信じたスタンダールが，いったいなぜルソーを「魂」の模範にしようと思いたったの

か。もはやクレ滞在がルソーのつよい影響，さらには両者の内的な同質性の自覚に彼を導いたのはあきらかであろう。この「魂のスタイル」という表現を「感受性」ということばに置きかえるならば，いっそう興味ぶかい事実が浮かびあがる。彼自身の形容として「感じやすい人間 homme sensible」という表現が最初にもちいられたのは 1803 年 7 月 31 日クレ発信のムーニエ宛書簡であり，この表現や「感じやすい魂 âme sensible」といった同種の自己形容が手紙や日記のなかに見られるようになるのはくだんの滞在よりも後なのだ[14]。したがって以上の考察をつぎのようにまとめることができよう。1803 年の『新エロイーズ』の読書体験とその反省は，ルソーとの「感受性」の親近性を自覚する契機として位置づけられる。換言すれば，「自己」を点検するスタンダールの意識において自身の「感受性」が客観的な視点から主題化されたモメントだったのである。

だが，この自覚はルソーにたいする手放しの称賛に終わるものではなかった。まず 1804 年 6 月 7 日付のルイ・クロゼ宛書簡で，ルソー的な感受性にたいする疑念が表明される——

> 僕は悲嘆にくれ，自分ほど感じやすくない人々，フェリックス・フォール，そして最後にきみの手紙の文章のことを考える。
>
> 「〔…〕きみと同様に僕もつぎのように考える。彼は自分があまり感じやすくないので頭にきて，そのようになろうと努力しているのだよ」。
>
> この一文は，僕にとって光のひらめきだ。僕はそこに感じやすいジャン＝ジャックによって，この世紀に非常にありふれたものになった性格を見るのだ。〔強調スタンダール〕[15]

つまりルソー的な感受性が当時すでに青年のステレオタイプにほかならないのではないかという反省である。翌日ただちにエルヴェシウスの『人間論』の再読が開始され，つづく 7 月 23 日からのミラボー伯選集の読書によって批判的検討はいっそうすすめられる——「ミラボーはエルヴェシウスと同様に，ジャン＝ジャックが一般的な理論よりも道徳上の観察や個人の日々の幸福に適用可能な教訓の数々によっていっそう偉大であると断じている。/ このことをわたし自身で確かめること。理性的なエルヴェシウスの評価に合わさった情熱的なミラボーの判断のもつ重みは，たいへんな重みだ」[16]。ルソーと精神的な対極

にあるエルヴェシウスよりも，前者や自分に近い「情熱的」なミラボーの批評だからこそいっそう真実味があるというわけだ。だが，さらに本格的な再検討は同年8月4日と5日にルソーの『ダランベールへの手紙』をきっかけにおこなわれた。ただし結果はけっして一面的な批判に終始したわけではない。興味ぶかいのはスタンダールのとった検証法の判断基準である——

> この真実（タンサンがわたしに夭折について正しく推論させている）のおかげでわたしにはつぎのことが理解できる。最高の頭脳とともにもっとも美しい魂をもつことになるわたしの登場人物たちは，自然にしたがうことでわたしが考える以上に愛すべきものになるだろう。
>
> ジャン＝ジャックの言っていることは本当だ。自分の感覚において読みとられた（*Lu dans mes sensations*）。
>
> ジャン＝ジャックはモリエールについてかなり本当のことをいっている。〔強調スタンダール〕[17]

感覚をあらゆる認識の根拠におく方法は，彼がコンディヤックやエルヴェシウスなどから継承したものであるが，換言するならば「真実」の試金石は彼の「魂」にほかならず，このように試された「真実」はいっそう内的な親近性の確認へと導くものであろう。

ルソーの影響の再検討をすすめるスタンダールにとって，同月8日『ビブリオテーク・ブリタニック』誌掲載のスチュワート『人間精神論の要綱』の抜粋，なかでも「感受性」についての一節が決定的な意味をもつ出来事となったとしても驚くにあたるまい[18]。要約するならば，感受性と想像力とは緊密な関係にあり，熱烈な感受性の持ち主は理性の力で想像力を制御できないといった主旨なのだが，とりわけ注目に値するのは熱狂的な感受性の問題点がルソーを例にして論述されている点である。すでにルソー的な感受性を自らに認めていたスタンダールが，これを自身の問題と捉えたのもごく当然のことといえよう。この発見が同月10日には，「感じやすい人間としてわたしが覚える感動と劇作家（poète）として感じる感動とを区別しなければならない」という認識となって結実する[19]。以上が「脱ルソー化」ということばの生まれた背景であり，それがルソーの文学的・思想的な影響の超克のみならず，スタンダール自身の〈感じやすい魂〉の抑制を意味することはあきらかであろう。小論の目的

は作家のルソー観の検討ではないので，以下の論述における「脱ルソー化」の基本的な定義としては「判断力への感受性の過度の影響を除く」というデル・リットの解釈をあげておくにとどめたい[20]。

## 2

では〈ベーリスム〉の獲得にいたる過程で，スタンダールの「感受性」の認識はどのような軌跡を見せるのであろうか。1804年末のデステュット・ド・トラシーの著書『観念学要綱』との出会いが，以後のスタンダールの思索に多大な影響をあたえたことはよく知られている。だが，判断力の「脱ルソー化」の実現にむけての困難は当初から充分に自覚されていたにちがいない。1805年1月15日の『日記』の記述——

> 感覚と，かくも流動的で敏感な内的能力がある以上，わたしが狂人になることは大いにありうる。
>
> そのばあいはわたしをクレへ連れていくよう，ここでお願いしておく。わたしがたぶん癒りうるとすれば，そこしかない。わたしに面倒な判断を下さねばならぬようにさせることはすべて避けていただきたい。病んでいるであろうのは判断力である。わたしはそれを感じる。[I, 182]

クレがスタンダールの「魂」にとっていかに特権的な場所であるのかをあらためて理解させる文章だが，もちろんここでの深刻な認識からただちに「感受性」が全面的に否定されていると断ずることはできない。たとえば同年2月11日付の『日記』に，「わたしの感受性は，この地上ではもちいられぬがゆえに，あげてシェークスピアの登場人物たちのうえにそそがれ，そしてわたしの天稟を増すであろう」[I, 212-213] と書かれているように，彼にとって「感受性」は劇作家の資質ときりはなせないものなのだ。このような「感受性」をめぐる両義的な反応の背景には，「劇作家」にくわえて「生活者」としての必要からの自己検討があったと思われる——

> ほんとうに，わたしは子供だ。わたしには感受性が過剰であり，そしてこれまで，わたしは魅力的であるためにはあまりにも自分の感受性に信をおきすぎた。わたしはこ

とばのあらゆる意味で，まったく訓練のたらぬ子供だ。[I, 270. 1805年3月17日]

悪習とルソーへの心酔とによるわたしの憂鬱な性格を矯正できたあかつきには，わたしはひじょうに愛すべき性格，ひじょうに情のふかい基礎の上におかれた最良の趣味からくる陽気さをもつようになろう，と期待している。
メラニー，そのとき君はぼくを愛するであろうか。[I, 315. 1805年4月10日][21)]

いずれも女優メラニー・ギルベールへの恋心から綴られた文章である。女性に愛されること，あるいはまた社交の場での成功。自己認識の能力は，そのような実社会における彼個人の「幸福」の実現のために行使されている。換言するならば，ここでのたいへん実用的ともいえる「脱ルソー化」の目的はすでに〈ベーリスム〉の領域に踏みこんでいるといえよう。

1805年末のトラシーの『観念学要綱』第3部『論理学』の読書によってスタンダールの観察と推論の方法は一段と確実性をましたはずである[22)]。いわば彼の「脱ルソー化」に大きく貢献する知的収穫であったにちがいないのだが，翌年の『日記』から窺い知れるのは自己改革の悪戦苦闘ぶりなのである——

不幸にも，わたしはまだ観察しながら感じている。そして，このことはわたしに感情を嫌悪させ，わたしがよく理解するのを妨げるのだ。[I, 426. 1806年2月26日]

さらに同年5月28日の『日記』では，マルセイユ滞在によって「内気」と「憂鬱症」[I, 446] が治ったと書かれているにもかかわらず，4カ月後の『日記』はふたたび「憂鬱症」に苦悩するスタンダールの姿を伝えている——

わたしは自分が大馬鹿者であるのを認めねばならない。わたしは悲しくあろうとしておおいに楽しみをそそいでいるのだ。〔…〕
テュイルリーの木々や窓の下にいる人々，ここからクラマールへの大街道を目にしたら，わたしは愚かしいメランコリーにおちいるだろう。
この感情にも何かしら良いところはあるのかもしれない。だが，このために行動する気持ちは失われ，倦怠と英国趣味のなかに入り込み，他人にたいして不愉快な人間になってしまう。人の集まりの中にいても悲しくなるばかりか，悲しみにたいする感受性がいや増すのだ。[I, 469]

「イデオローグ」たちに学んだ方法論は，人間社会の認識や自身の自己認識に

おいてきわめて有効であったとは考えられるが，ただちには「脱ルソー化」の決定的な解決手段となりえなかったことはまちがいない。

1806年10月，スタンダールは臨時陸軍主計官補として軍職に復帰する。1810年までのあいだ，プロシア—ロシア戦役，オーストリア戦役を経験し，ナポレオンの政府でキャリアを積む。1810年に国務院出仕心得に任命された彼は経済的にも余裕ができ，パリで羽振りのよいダンディーな生活を送りはじめる。アレクサンドリーヌ＝テレーズ・ダリュ伯爵夫人への恋，オペラ・ブッファの第2歌手アンジェリーヌ・ベレーテルとの同棲。彼の行動原理の総体である〈ベーリスム〉は，そのような充実した生活状況のなかで完成したのである。3月17日には，はじめて『日記』に「ベーリスト」と「ベーリスム」という語が登場するが，この〈ベーリスム〉獲得前後の期間，『日記』では「過剰な感受性」についての彼の認識に大きな変化が認められる。まず「判断力への感受性の過度の影響」について，スタンダールのかつてのような懸念や苦悩が1806年の軍務復帰以後はほとんどなくなるという点があげられる。かわって1811年には，つぎのような記述が見られるようになる——

> わたしは感受性によって楽しんでいる。わたしがすすんで行うことは，すべてこの感受性を増大させるように思われる。それは，たとえばマキャヴェルBの厚かましい性格とは反対の部類のものだ。[I, 707. 7月18日]

> 依然，感受性はこのような人物〔ジャコモ・レーキ〕とテラース氏〔フランスのブルジョワの典型〕とのあいだのたいへん際立った違いを示す記号なのだ。[I, 720. 8月29日]

日常の交際にもとづく人間観察において「感受性」は性格的な典型，あるいは国民性といった概念とむすびついた肯定的な判断基準となっている。たしかに「感受性」を人間の類型的区別の指標とする習慣は早い時期にも認められよう。だが，かつての腹心であり，彼が「感じやすい魂」を認めていた妹ポリーヌ・ベールにたいする評価が[23]，1814年には「わたしに比べてはるかに感受性のつよくない」[I, 902] と大きく変わってしまう点から考えても，その適用は以前にくらべていっそう厳密になっていると推察される。『日記』はこうした判断力の研磨に少なからず貢献していた。たとえば，1811年8月10日付の

『日記』の一節には「わたしの方法，それはこの日記だ」という彼自身の自覚を読むことができる――「今度の9月10日には，8月10日の内気さをすっかり忘れてしまっていようし，それを正しく判断するまでにさえなるだろう」[I, 710. 強調スタンダール]。彼の判断力が『日記』が書かれるときよりも，むしろ読み返されるときに発揮されるのも，「感じやすい魂」には冷却期間が不可欠だからであろう。後年，彼は『アンリ・ブリュラールの生涯』のなかで，「わたしは一生を通じてつよく感じた。が，その感じた理由はずっと後になってからでないとわからないのだ」[II, 820] と語っている。こうした〈ベーリスム〉の方法の完成につれて以前ほどには「脱ルソー化」は意識されなくなっているのは確かである。もっとも軍人や官吏としての規律にしばられた多忙で行動的な日常も彼の憂鬱な夢想癖を許さなかったであろうし，安定した経済状況なども無視できまい。

自己認識のさらにいっそう重要な契機としてはイタリア的な感受性の再発見があげられよう。1811年8月から11月にかけてスタンダールはイタリア各地を旅行する。目的は「人間を知ること」[I, 721] だったが，ミラノに到着するや彼は強烈な感動におそわれるのだ――「わたしの心ははちきれそうだ。昨晩も，今日も，甘美な感情を味わった。わたしは今にも泣いてしまいそうだ」/「11年とは何ということだ。わたしの記憶はすこしも弱まってなかった。記憶は無上の恋心によって生気を保たれていたのだ」[I, 735]。そしてアンジェラ・ピエトラグリュア夫人との再会。幸福感に酔った彼に書きとめることができたのは，「それぞれの事物がわたしの魂を打つときに発する音」[I, 752] である。このような彼の目にイタリアは以前とかわらず「感受性の国 pays de sensibilité」[I, 766] と映る――

> ほとんど宿駅ごとに取引をしなければならない。こういった面では他のすべての国々と同様，文明はフランスほど進んではいない。彼ら〔イタリア人〕は感受性と，その結果である自然さをそなえている。したがって，この国はすぐれて芸術の国なのだ。[I, 800. 強調スタンダール]

スタンダールがルソーの影響とは別の領域に自らの「感受性」の源泉を再認したことは想像にかたくない。滞在中の『日記』には，1800年から1801年にか

けてのイタリアでの「2年間」が彼に「感受性の無尽蔵の源泉」[I, 738] をあたえた事実にとどまらず，スカラ座での観劇が青年期の性格形成におよぼした「第1級」の「影響」[I, 736] なども記されている。同様に彼が滞在中，崇高さと甘美な憂愁にみちたイタリア芸術にあらためて魅了されたという点も無視できまい。帰国後ただちに『イタリア絵画史』の執筆がはじめられる。後年，その『イタリア絵画史』のために，「わたしの感じ方は同胞〔フランス人〕の感じ方とはまったく違うものでありえる」[I, 932] という余白メモが残されている。スタンダールは自身の「感受性」をイタリア的なものと位置づけることで，これまで以上に自身の内的な独自性を積極的に肯定できるようになったのであるまいか。1813年9月7日，再びミラノの地を訪れたスタンダールはつぎのように記している——

> 今朝10時，ちょうどミラノの大聖堂が見えたとき，わたしはイタリア旅行が自分をいっそう独創的に，より自分自身にしてくれると考えていた。[I, 881. 強調スタンダール]

同月15日付の『日記』には「わたしはおそらく多くのことでJ-J・ルソーとは反対の人間である」[I, 885] とあり，さらに23日には「わたしは自分の魂のすべてを再び見いだした」[I, 888] とさえ書かれている。翌1814年7月4日付の記述は「念入りに綴られた日記」の遠くない終わりを予想させるものだ——「自分自身を知るが，変わることはない。しかしそれでも自分を知らなければならない」[I, 907]。〈ベーリスム〉の獲得時期と連結する，このイタリア的な感受性の再発見が，スタンダールの自己省察においてきわめて重要な意味をもつのはもはやあきらかであろう。1811年のミラノ滞在は，彼の「感受性」の認識において1803年のクレ滞在と等しく無視できない転機なのである。1811年の『日記』のうち「A tour through Italie」と題されたイタリア滞在部分を出版しようという奇妙な企てが1813年になって思いつかれたのも，スタンダール自身その記念碑的な意味を自覚していたためだと思われる。

## 3

いわゆる「念入りに綴られた日記」の消滅以後，スタンダールが蔵書の余白

に残したメモには，彼自身の「感受性」についての直接的な言及はきわめて乏しくなってしまい，その認識の軌跡を再構成するのは容易ではない。だが，1818年にはじまるマチルド・デンボウスキー夫人への恋，1824年から1826年にかけてのクレマンチーヌ・キュリアル夫人との恋愛など，作家の感情生活における重大な出来事が豊富なだけに，その検討は充分に意義のあることだろう。おそらく，この空白は『エゴチスムの回想』の考察によっていくぶんかは埋めることができるのではあるまいか。

『エゴチスムの回想』の執筆は1832年6月から7月にかけてであり，当時スタンダールは49歳であった。実際に回顧されたのは，1821年から1822年の夏までであり，デンボウスキー夫人への恋が実らずに傷心をいだいてイタリアからパリに舞いもどった時期に相当する。この〈エゴチスム〉の書の課題は，内心の検討によって「揺るぎない内面的真実」を探り出し，後世の読者に提示することである[24]。だが，そのばあい彼にとって問題となったのは自身の「感受性」が周囲の人間の理解をこえた性質であるという点ではなかったろうか。彼は1813年2月4日付の『日記』にその認識をとどめている――「わたしは自分がはなはだしく感じやすいと思う。それは顕著な特徴だ。この感受性は度を越してしまうことがあるが，それを話してもフェリックス〔フォール〕以外の人間には理解されがたいものだし，その彼にたいしてでさえも長々と話さなければならないのだ」[I, 835]。では，『エゴチスムの回想』のなかで「感受性」はどのように表現されているのだろうか。

まず『日記』と異なる際だった特徴として，スタンダールが「感受性」または「感じやすい魂」などといった呼称をもちいずに，自分の過剰な感受性を説明しようとしている点に注目したい。いったいなぜ彼はこれらの表現を避けたのであろうか。やはり偉大な先例ジャン＝ジャック・ルソーの存在が念頭にあったためではあるまいか。『アンリ・ブリュラールの生涯』のなかではルソーの『告白』への批判的な言及がすくなくないのにたいして，『エゴチスムの回想』では暗示がわずかに1箇所認められるだけである[25]。とはいえ，これまでたびたび『告白』の文体を批判的に検討してきた作家が[26]，この種の企てにおいてルソーを意識しなかったとは考えにくい。もちろんルソーの文学的な亜流のうちに数えられるのを懸念したなどという皮相的な理由からではないだろう。サン＝シモン公爵，ロラン夫人，チェッリーニなどスタンダールが愛読

する自伝・回想録の著者のなかで，もっとも彼の人格形成に影響をあたえ，また彼自身それを認識している作家はルソーただひとりだといってよい。もちろん，1811年にミラノで彼の独自性，「自分自身」である根拠を感受性の二元的な形成においたスタンダールが，ルソー的な主題系を駆使して自己の内的な真実を表現しようとするはずがない。『エゴチスムの回想』の執筆にさいし，自身の内的な独自性を描くために採用した方法は周知のように「完全な誠実さ」[II, 431] であった。

しかしながら，この方法はスタンダールになじみのうすい読者を結果的に当惑させることになろう。というのも，スタンダールが自己を語るのにもちいる表現が一般的にみてネガティブな価値をもつ，誤解されやすい性質のものだからだ。たとえば年齢の比喩もそうした例のひとつである[27]。第1章ではパリの友人たち，すなわち「あの情のひとかけらもない連中」に自分の傷ついた恋心を悟られないようにすることが「じっさいに10年間にわたってわたしの生活を支配した原則だった」[II, 434] と語られるが，これらの友人たちと自分との対照においてスタンダールは自己の内面を暗示させる方法をとっている。「心のひからびた友人」のひとり，リュッサンジュの偽名で登場するアストルフ・ド・マレストについては，「そのころ36，7だったが，50歳半ばの男のような心と頭をもっていた」[II, 436] と形容する一方で，作家自身にかんしては，「1821年といえば，わたしはまだ20才の青年のようだった」[II, 486] と語っている。この用語法の意味をごく一般的に解釈すれば，年齢に不相応の「未熟さ」ということになろう。だが，つぎの記述を読むならば，けっして卑下しているのでないのはあきらかだ——

> このふたりはわたしと同じ時代の人間だが，感情のひからびた，浮世に愛想をつかした哲学者になっている。わたしはそうなるどころか，ことが女性にかんするかぎり，さいわいにも25歳の青年のようにいつもだまされている。[I, 519]

興味ぶかいことに，彼は1821年当時ばかりか1832年の執筆時においても自分は「青年」のような内面をもっていると認識しているのである。スタンダール的な二重の価値をもつ用語法の例としては，ほかに「狂気」というモチーフの積極的な使用があげられる——「このばあいもやはり，1821年にわたしをあ

れほど異様な人間にしていた狂気がいくぶんかあったのである」[II, 442] /「だが若いころは，出たとこ勝負でしゃべりだすと，わたしは常軌を逸していた（j'étais fou)」[II, 476] /「イタリアで経験した色々な感情のニュアンスを思いおこさせる本を校正するということは，わたしにはずいぶん危険なことだった。〔…〕わたしは気が狂いそうになった」[II, 515]。これらはいずれも過去の反省の弁などではなく，みずからの恋の「憂鬱 spleen」[II, 474] の諸相を可能なかぎり率直につたえようとする文章であろう。1821 年当時スタンダールは周囲の人間たちから「感傷的な誇張家」[II, 500. 強調スタンダール] と見なされていたし，とうぜん執筆中もそうした危惧はたえず念頭を離れなかったはずである。にもかかわらず，彼は「軽蔑すべきエゴチスム」[II, 487] と充分承知したうえで，つぎのような「肉体的な欠陥」さえも書かずにはいられないのだ――「その頃のわたしはイタリアふうのデリケートな神経のかたまりだった。部屋が閉まっていて，なかに 10 人の人間が腰掛けていれば，それだけでもうたまらないほどむかむかしてきて，ほとんど失神しそうになる」[II, 463]。この過敏さは必然的に第 3 者の目にも異常に映っていた――「わたしが病気になったとき，どの医者もきまって，わたしが徹底した神経過敏症なので，面白がってわたしを怪物あつかいにした」[II, 487. 強調スタンダール]。ポール・ヴァレリーに倣ってこの種の記述の背景に，普通であることを嫌い，自分自身をきわめて特異な人間にしようとする偏執を見なければならないのだろうか[28]。しかしながら，つぎの例はスタンダールの神経の過敏さがまったく生理学的な次元だけでは理解できないことを示すものだ――

> いまから考えてみると，わたしの心は病気にかかりどおしだった。いやしい人間をみると，ほとんど恐水病的な嫌悪の情におそわれた。下品な田舎のふとった商人の話を聞くと，頭の働きがどうかしてしまい，その日いちにちが憂鬱になる。〔…〕15 歳から 25 歳にかけて，わたしは憂鬱のなめどおしだったが，こうした少年時代の傾向が，またはげしくぶりかえしてくるのだった。[II, 477]

20 代がスタンダールにとってどのような時代であったのかはすでに見た。過剰な「感受性」のためにしばしばメランコリーに苦悩し，「脱ルソー化」に腐心する青年。したがって，この「憂鬱病」の特徴の叙述に韜晦的な自己肯定を読むことはできまい。「メチルド」へのかなわぬ思いが 20 代前半の心的状態を

蘇らせた，そうはっきりとスタンダールは認識しているのである。もはや「20歳の青年」という年齢の比喩がたんに一般的な「若々しさ」や「未熟さ」を含意するのでないのはあきらかであろう。それは彼が1803年にクレで認識した「感じやすい魂」の異称なのである。しかもここで語られているのは，ほかならぬ「感受性」の「判断力」への過度の影響であることは間違いない。スタンダールは自身の判断力が持ち前の〈ベーリスム〉にもかかわらず，依然として心の平静に左右されるのを自覚しているのだ――「考えてみると，なにか望んでいたとすれば，人間を知ろうということだった。こんな考えを起こさない月はおそらくなかったろう。だが，道楽だの，情熱だの，狂気めいた発作だのが，わたしの生活を占めていた。これらが水面を静かにさせてくれないかぎり，その考えが水面にイメージをむすぶはずがなかった」[II, 509–510]。文脈から考えて「脱ルソー化」とは，より適切には「脱メランコリー」と呼びかえてしかるべきであろう。

『エゴチスムの回想』で試みられた自己認識のもっとも重要な点は，1821年の回想を介しながらそれ以前の青年期から執筆時にいたる終始一貫した内的同一性，つまり不変の内面的な真実を，49歳のスタンダールがあらためて確認したという点である。「わたしの方法，それはこの日記だ」という彼のことばを思いおこそう。彼の自己認識は総じて「書いているその日」[II, 452] の考えであり，要するに，書き，そして読み返す作業と不可分なのだ。49歳で試みられた自己認識は，執筆中のスタンダールにとっての切実な意味をもったのではあるまいか。

## 4

『エゴチスムの回想』執筆の心情的な動機とその放棄の理由については，すでに別の場所で検討した[29]。要約すれば，ローマとチビッタ＝ヴェッキアでの危機感（日常的な倦怠・病気の悪化・「老い」の不安）を「不変の感受性」という内的同一性の確認によって克服し，創作への展望をもった，というものであった。つまり『エゴチスムの回想』をひとつの転機と見なしたわけだが，このことを小説の創作とのかかわりからさらに考察してみたい。

スタンダールの小説の主人公たちに作家自身の感受性や行動原理などが投影

されているのはよく知られた事実である[30]。もちろん，これを否定するつもりはない。ただ，この文学的な「父子関係」は『エゴチスムの回想』を境にして，その実践に若干の変化が認められるのではないだろうか。つまり『社会的地位』と『リュシアン・ルーヴェン』では創作上のコンセプトにおいて，『アルマンス』や『赤と黒』のばあい以上に，主人公と作家とのあいだの内的な同一性がいっそう積極的に意識されているように思えるのだ。

まず『社会的地位』であるが，モーリス・バルデッシュが「自伝的な逐語訳」と呼んだように[31]，テクストにもりこまれた伝記的要素の多寡をあらためて検討するまでもないであろう。ここで注目したいのは，2カ月あまり前に『エゴチスムの回想』のなかで確認された不変の内面的な真実，すなわち「感じやすい魂」がつぎのように主題化されている点である。第1章の主人公ロワザンの人物描写を見てみよう——

> 心の琴線にふれることば，街角で耳にしたり，職人の店で偶然でくわす不幸の偽りなき表現，こうしたものにロワザンは涙をみせるほど心を動かされるのだった。しかしながら，苦悩の表現にほんのわずかの誇張や，あるいは見せかけのおそれがすこしでもあると，もとの動機がいかに正当なものであろうとも，ロワザンのことばにはもはやこのうえなく辛辣な皮肉があるばかりであった。[32]

「わたしは老いはじめている。そのことに気づかないのは間違いだ」[33] という科白や，草稿に記された「理想化されたドミニック」[34] という記述から考えても，主人公のモデルは執筆時の作家自身であろう。ただし，ここでとりあげられた性格的な特徴がスタンダールの不変の「感受性」を示すものであることは，それと類似した記述が『エゴチスムの回想』中のイギリス娼婦「ミス・アップルバイ」の挿話にとどまらず，1804年5月11日付の『日記』にも見られる事実からも判断できる——

> テュイルリー公園で憐れな老人に15スーやったが，まったくこの男は私の心を深くうつに必要なものすべてをそなえている。すぐあとで，3歳ばかりの娘としゃべっている父親を見る。この2つの小さな出会いは深くわたしの心をうつ。[I, 76]

先のロワザンの人物描写につづいて「16歳になるや，そのように出来上がっ

たこの人物」とあることから，スタンダールには自らの「感受性」の形成が16歳ぐらいまでに終わったという認識があったはずだ。この年齢は『エゴチスムの回想』のなかの「友情や恋愛のことでは，わたしは性急で，熱烈で，夢中で，徹底的に誠実だが，それもさめはじめるまでのことだ。そうなると16歳の狂気が，たちまち50歳のマキャベリズムにかわる」[II, 493] という記述とも符合しよう。このように考えるならば，『社会的地位』とは『エゴチスムの回想』のなかで認識された不変の内的真実を小説のなかで展開する試みと位置づけることができるのではないだろうか。

『リュシアン・ルーヴェン』のばあいは主人公リュシアンが20代前半の青年という設定だけに，ロワザンの二元的な性格――「16歳の狂気」と「50歳のマキャベリズム」[35] ――とは異なり，いっそう作家の自己投影は前者に焦点が絞られたものとなろう。ヴィクター・ブロンバートの指摘のとおり，スタンダール的存在のなかでもっとも作者に似ているリュシアン・ルーヴェンは，きわだって自己探究の志向を見せている[36]。とりわけリュシアンがスタンダールと共有するさまざまな事項のなかで注目したいのは，テクストのなかで「天真爛漫な心 cœur naïf」と形容される性格的な特徴である――

> リュシアンはあまりに醜いと思うことにはすべて目をそむけてきたために，良家のパリっ子なら中学最終学年の16才ではやくも屈辱だと思うあどけななさ（naïveté）を，こうして23にもなるのにまだのこしていた。彼が世なれた男のまねができたのも，まったくの偶然にすぎない。女心を自由にあやつってこれをわくわくさせる術にかけては，たしかに，彼なんか老練でありえたはずがない。[37]

草稿の当該箇所への「モデル――ドミニック彼自身。ああ！ ドミニック彼自身」[38] という書き込みが明示するように，この「天真爛漫な心」が作者自身の写しである点についてはもはや論ずるまでもない。肝要なのは，この女性にたいする「あどけなさ」が，スタンダールの「感受性」をめぐる認識の基調をなすテーマのひとつに数えられる点である[39]。しかも引用箇所を含む舞踏会の場景が最初に執筆された事実を考えあわせるならば，『リュシアン・ルーヴェン』の構想にもまた作家自身の「感じやすい魂」の物語化があったことは疑えまい。『社会的地位』の設定を前者の第4部として流用するプランが思いつかれたのも，リュシアンとロワザンの両者に共通する「感受性」という前提があっ

たからだとは考えられまいか。

『エゴチスムの回想』以前の小説，『アルマンス』と『赤と黒』のばあい，それぞれの自家用本にはモデルとしての作者の存在を示す「ドミニック」といった記述は見られない。まず『アルマンス』では，オクターヴの設定において作家の念頭にあったモデルのひとつは，自家用本の「ルソーの魂のように情熱的な魂」[40] という記述の示すとおりである。とはいえ，これを文字どおりに受けとることはできない。1826 年の執筆時，「この小説をつくりながら，わたしはたいへん憂鬱だった」[II, 101] と回想されているように，スタンダール自身がキュリアル夫人と恋の破局のために深刻なメランコリーに陥っていた。主人公の人物設定において「ドミニック」ではなく「ルソー」が意識されたのは，『アルマンス』の執筆そのものが「脱ルソー化」「脱メランコリー」の作業だったからではないだろうか[41]。換言するならば，スタンダールは積極的に自己を投影したとはいいがたく，きわめて両義的な感情を抱きながら，オクターヴの人物像に自身の姿を刻みこんだように考えられるのだ。

他方，ジュリアン・ソレルの性格にかんしては，『リュシアン・ルーヴェン』第 2 部・第 63 章の手稿の余白に興味ぶかい記述が残されている――

> リュシアンはどんな性格をしているのか。たしかにジュリアンの気力と独創性ではない。これは社交界では不可能だ（1835 年において，80,000 フランの年金収入があると）。彼について考えるとき，性格をのぞけばはっきりしている。[42]

あきらかにリュシアンとジュリアンは異なる性格設定である。だがそれ以上に注目に値する 2 者の相違は，ジュリアンの性格にかんするスタンダールの考えがはっきりとしている一方で[43]，リュシアンについてはすでに小説の主要部分が書かれたあとであるにもかかわらず性格の把握がなされていないという点であろう。奇妙な照応である。『エゴチスムの回想』，そして『アンリ・ブリュラールの生涯』のなかで繰り返される「わたしはどんな人間であるのか」という自己認識の問いかけを作者ともっとも共有する主人公の性格を，ちょうど自分自身の性格と同じように，スタンダールは答えることができないのだ――「わたしは自分がすこしもわかっていないし，ときどき夜などにそのことを考えると情けなくなる。わたしは善良なのか，意地悪なのか，利口なのか，馬鹿

なのか」[II, 431][44]。両者に同一の「感受性」の認識にもかかわらず，性格的な輪郭については定めえないという意味において，リュシアンとは「理想化されたドミニック」ではなく，まさに「ドミニック彼自身」なのであろうか。この現象が意味するのはフィクションを通じての自己認識であり，すくなくとも『エゴチスムの回想』以後，スタンダールは『社会的地位』と『リュシアン・ルーヴェン』という2つの試みにおいて，つぎのトラシー夫人のことばを実践したのだとは考えられまいか――

> わたしは若い頃に歴史書のような伝記（モーツァルト，ミケランジェロ）をいくつか書いた。そのことをいま後悔している。このうえなく偉大な事柄についての真実は，もっとも些細なことについてと同じように，到達することがほとんど不可能に思われるし，できたとしても，ほんのすこし詳細な真実でしかない。トラシー夫人はわたしによく言ったものだった。「もはや小説のなかでしか真実に到達することはできないのです」
>
> わたしには，ほかのどんなところであっても，それが大それた考えであるということが，日々いっそうよく分かっている。そういうわけで，わたしは『ルーヴェン』の206頁まで書いた。[II, 198. 強調スタンダール]

この「真実」の探究が『アンリ・ブリュラールの生涯』に接続するものであることは，「1836年にわたしの口から洩らす説明」は「歴史」ではなく，「多少とも真実らしい小説」[II, 904] であるという同書の記述にあらわれていよう。『社会的地位』の執筆というかたちで，スタンダールの関心が「現在の自己」に引きつけられたのは，おそらくジウリア・リニエリ＝デ＝ロッキへの恋という時事的な問題とも無関係ではあるまい。作家の心中で，幼年期という自己の最初の源泉に遡及する必要がつよまったのは，『リュシアン・ルーヴェン』の執筆中，3人称体の小説では表現不可能な「真実」に思いいたったからではないだろうか。

## 結　語

スタンダールは「汝自身を知れ」という箴言の実践のたびに，読者にたいして自己認識の限界を表明している。それがジョルジュ・ブランの示唆する合理主義者としての失望ではないとすれば，フィリップ・ルジュンヌの考えるよう

にテクストそれじたいが真の解答なのだろうか[45]。いずれにせよ，『日記』に始まる作家の自己検討をつうじて「感受性」が関心の対象となっているばかりか，その認識はたえず再検討され深化されていることにもはや疑問の余地はあるまい。最後に，以上の考察をふまえて『アンリ・ブリュラールの生涯』の特徴について若干の私見を述べておきたい。

『アンリ・ブリュラールの生涯』でまず目をひくのは，読者にたいして自身の内的な同一性が，たとえば「わたしは10歳のときと同じように52歳になってもそうなのだ」[II, 634] というように表明されている点である。「感受性」についても『エゴチスムの回想』のような暗示的な書き方は見られない——

> 「その感受性はあまりにはげしくなった。他の人びとをほんのわずか傷つけるものも，彼をして血を流さしめるほど傷つけた」。じじつわたしは1799年にこのとおりで，なお1836年の今日も同様である。[II, 877]

ほかにも「自己を見失い狂気にいたるほど感じやすい魂」[II, 658]，「極度の感受性」[II, 809] といった表現が認められるが，『エゴチスムの回想』で自らに禁じたこれらの表現をもちいずには自己の形成期を語れぬことを作家は自覚するにいたったのではないだろうか。このことは，同書ではみられなかったルソーへの直接的な言及が『アンリ・ブリュラールの生涯』のなかで批判的なかたちで頻出するという現象とも無関係ではあるまい。ルソーにたいする負債と同時に，自身の独自性の主張という両義的な感情が批判となって顕在化したのだと思われる。

しかも彼自身の独特な「感受性」は『アンリ・ブリュラールの生涯』の方法の根幹にかかわっている。スタンダールの回想を支えるのは「感情的記憶 mémoire affective」にほかならず[46]，彼が確実に真実だと自負するのは，「わたしは自分の感情にかんすることにおいてしか真実性にたいする自惚れをもたない」[II, 640. 強調スタンダール] という記述のとおり，彼自身の感覚だけなのである[47]。このような認識をもつスタンダールにとって，1人称の「わたし」の使用は絶対に代替不可能な選択であったといわねばならない[48]。もし彼が感受性の同一性を確信していなければ，「わたしはそのことを1794年に感じたのと同じように激しく1835年にも感じている」[II, 700] と表現する

ことはかなわなかったはずだからである。真実の保証は歴史的な時間のなかで「いま」まさに回想しつつある「わたし」の感覚・感受性なのであり，むろんその前提となるのは「過去」の「わたし」と「いま」の「わたし」とが内的に同一であることなのだ。この認識方法の原型が，「わたしの感覚において読みとられた Lu dans mes sensations」という 1804 年の『文学日記』の記述にさかのぼって認められることはもはや言うまでもあるまい。

## 註

1）『日記』『エゴチスムの回想』『アンリ・ブリュラールの生涯』のテクストにはプレイアッド新版（STENDHAL, *Œuvres intimes*. Édition établie par Victor DEL LITTO. Paris : Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 2 vol., 1981–1982）をもちいる。同版からの出典は，巻数 I, II とともにページ数を［ ］内に示す。なお，訳出・引用には人文書院『スタンダール全集』収載の邦訳（『日記』鈴木昭一郎訳，1978 年；『エゴチスムの回想』小林正訳，1978 年；『アンリ・ブリュラールの生涯』桑原武夫・生島遼一訳，1977 年）を使用するが，文脈によっては筆者が改変をほどこしたところがある。1806 年以降の『日記』からの引用は拙訳による。

2）Voir DEL LITTO, «Préface», in *Œuvres intimes*, op. cit., tome I, pp. XIV–XV.

3）STENDHAL, *Correspondance générale*. Édition V. DEL LITTO avec la collaboration d'Elaine WILLIAMSON, de Jacques HOUBERT et de Michel-E. SLATKINE. Paris : Libr. Honoré Champion, 3 vol. parus, tome I [1997], p. 109.

4）Voir V. DEL LITTO, *La vie de Stendhal*, Paris : Éd. du Sud, 1965, pp. 80–81.

5）STENDHAL, *Correspondance générale*, op. cit., tome I, p. 119.

6）Raymond TROUSSON, *Stendhal et Rousseau. Continuité et ruptures*, Cologne : DME, 1986, p. 42.

7）1803 年でもルソーへの言及は少なくはないが，他の作家に比較して抜きんでた扱いをされているとはいえず，また自己認識とは関係ない文脈で行われている。1803 年 1 月の『文学日記』の読書リストではルソーの名は 2 番目に重要な作家の列に見いだせる（STENDHAL, *Journal littéraire I*. Texte établi, annoté et préfacé par V. DEL LITTO, in *Œuvres complètes*. Nouvelle édition établie sous la direction de V. DEL LITTO et Ernest ABRAVANEL. Genève : Cercle du Bibliophile, 50 vol., 1967–1974, tome XXXIII [1970], p. 105）。また 1803 年 4 月の『文学日記』中の，小説が個人の性格にあたえる影響についての一般的な考察の余白に，「これが人生の歴史だ。わたしの小説とはルソーの著書だったのだ」というル

ソーの影響の自覚が書きくわえられたのが1804年11月21日である点から考えても，前年4月の時点でスタンダールが影響をつよく意識していなかったのはあきらかだ（*ibid.*, p. 140）。

8）STENDHAL, *Correspondance générale*, op. cit., tome I, p. 4.

9）STENDHAL, *Journal littéraire I*, op. cit., p. 203.

10）*Ibid.*, p. 156.

11）STENDHAL, *Correspondance générale*, op. cit., tome I, p. 105. スタンダールにおける「原則 principes」の価値についてデル・リットはつぎのように説明している――「18世紀の考え方のなかで育った彼は，〈原則〉の価値に揺るぎない信をおいている」（voir DEL LITTO, *La vie de Stendhal*, op. cit., p. 92）。

12）STENDHAL, *Journal littéraire I*, op. cit., p. 302.

13）『アンリ・ブリュラールの生涯』第20章には『新エロイーズ』の読書が少年時代の感情教育に大きな役割を果たしたことが語られているが，これは少年当時の認識というよりも1835年12月の，つまり52歳のスタンダールの認識ではあるまいか。

14）Voir STENDHAL, *Correspondance générale*, op. cit., tome I, pp. 112, 113, 172, 181 et 273 ; *Journal littéraire II*, in *Œuvres complètes*, op. cit., tome XXXIV [1970], pp. 32, 95, 104 et 105.

15）STENDHAL, *Correspondance générale*, op. cit., tome I, p. 142.

16）STENDHAL, *Journal littéraire II*, op. cit., p. 38.

17）*Ibid.*, pp. 91–92.

18）デル・リットはスチュワート『人間精神論の要綱』を「脱ルソー化」を意識する契機ととらえている。Voir V. DEL LITTO, *La vie intellectuelle de Stendhal. Genèse et évolution de ses idées (1802–1821)*, Paris : PUF, 1959, pp. 161–164.

19）STENDHAL, *Journal littéraire II*, op. cit., p. 104.

20）DEL LITTO, «Notes et variantes», in *Œuvres intimes I*, op. cit., p. 1203. スタンダールのルソー観の変遷を中心に「脱ルソー化」を検討した考察としては，トゥルーソン前掲書，ならびにつぎの論文を参照――西川長夫「自伝と小説のあいだ――『アンリ・ブリュラールの生涯』におけるJ-J・ルソーの問題をめぐって――」，『スタンダール研究』，白水社，1986年，147–182頁。

21）Voir DEL LITTO, «Notes et variantes», in *Œuvres intimes I*, op. cit., p. 1254.

22）Voir DEL LITTO, *La vie intellectuelle de Stendhal*, op. cit., pp. 282–286.

23）Voir STENDHAL, *Correspondance générale*, op. cit., tome I, pp. 346–347.

24）『エゴチスムの回想』執筆の意図については，中川久定『自伝の文学――ルソーとスタンダール』，岩波新書，1979年，112頁を参照。

25）例としてトゥルーソンはつぎの箇所をあげている――「わたしの野心は幾多の挫折を重ねたが，だからといってわたしは他人が悪辣だったとは思わないし，彼らから迫害を受けたとも思わない」[II, 431]（voir TROUSSON, *op. cit.*, p. 156）。

26）1810年7月27日付の『日記』には，「『告白』第1巻とソフィーが登場する『エ

ミール』の巻を買い，全体をきれいに装丁させよう。そして，その背には，文体。最初の頁には7，8の真実を書き，それを毎日朝のお祈りのように読むことにしよう」[I, 609. 強調スタンダール] と書かれている。また1814年8月には『告白』第3巻を自分の文体で書き直すという「愉快な練習」も行っている（voir STENDHAL, *Journal littéraire III*, in *Œuvres complètes* op. cit., tome XXXV [1970], pp. 33–34)。

27) 『エゴチスムの回想』における年齢の比喩については，拙論「感受性と自己認識——スタンダール『エゴチスムの回想』管見——」，『ステラ』第14号，九州大学フランス語フランス文学研究会，1995年3月，72–80頁を参照。

28) 「自分が独自的でないという病の患者は，自分を他の人間たちから引き離すものをつくりだそうとして身を焦がす。自身を特異な人間にすることが，その偏執なのである」(Paul VALÉRY, «Préface» de *Lucien Leuwen*, in *Œuvres complètes*, op. cit., tome IX [1968], p. XVII)。

29) 拙論「『エゴチスムの回想』と『社会的地位』」，『文学研究』第93号，九州大学文学部，1996年3月，99–118頁を参照。

30) Voir DEL LITTO, «Préface», in *Œuvres intimes*, op. cit., tome I, p. X ; Victor BROMBERT, *Stendhal et la voie oblique. L'Auteur devant son Monde Romanesque*, Paris : PUF, 1954, p. 70.

31) Maurice BARDÈCHE, *Stendhal romancier*, Paris : La Table ronde, 1947, p. 240.

32) STENDHAL, *Romans abandonnés*, présentés et annotés par Michel CROUZET, Paris : Union Générale d'Éditions, coll. «10/18», 1968, p. 116. 引用文は拙訳による。

33) *Ibid.*, p. 122.

34) *Ibid.*, p. 158.

35) スタンダールが二元的な性格を自覚したのは，クレマンチーヌ・キュリアル夫人との破局の後だと思われる。1827年6月4日付のメモの「ドミニックのなかの2つの存在」[II, 90] という記述を『エゴチスムの回想』の「冷静な気持で才気を働かせるようになったのは，1827年になってからのことだ」[II, 447] という記述と照合するならば，くだんの破局が性格に多大な影響をあたえたのはあきらかであろう。しかも，「50歳のマキャベリズム」という表現には「老い」と「感受性」は反比例するというスタンダールの考えが反映されている点も強調しておきたい。1811年10月26日付の『日記』には「この日記はアンリのために書かれている。彼が1821年にまだ生きているとしてだが。わたしは未来のわたしに，今現在生きているわたしを笑いものにさせたくはない。1821年のわたしは冷徹で，いっそう厭世家になっていることだろう」[I, 805] と書かれている。1813年モスクワ退却後，自身の無感動な心について「早すぎる老い」[I, 845] と形容している。

36) Voir BROMBERT, *op. cit.*, pp. 71–79.

37) STENDHAL, *Lucien Leuwen*, in *Romans et Nouvelles I*. Édition établie et an-

notée par Henri MARTINEAU. Paris : Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1952, p. 924. 引用文は人文書院『スタンダール全集』(1977年) 収載の邦訳 (島田尚一・鳴岩宗三) をもちいる。

38) *Ibid.*, p. 1520.

39)「天真爛漫な心」とは「感じやすい魂」や「感受性」などと同種の形容である。引用箇所で語られているテーマはスタンダールの自己認識に恒常的に認められる。1811年のイタリア滞在中の『日記』――「わたしはあまりにも感受性がありすぎるので，ラヴレースの手練手管といった方面にはほんのわずかの才能もけっしてもちえないのだ」[I, 709] /「たしかに，ミラノで女に愛されていたら，わたしの性格はたいへん違ったものになっていただろう。わたしはおおいに艶福家になったことだろうが，そうなればわたしの芸術のために役立ちうるこの感受性の残り滓すらなくなっていただろう」[I, 738]。さらに同様の例として，すでに引用した『エゴチスムの回想』第11章の最後から2番目のパラグラフがあげられる。

40) V. DEL LITTO, «Stendhal, lecteur d'*Armance*», *Stendhal Club*, n° 71, avril 1976, p. 199.

41)『アルマンス』の創作と当時のスタンダールの苦悩との密接な関係にかんしてはつぎの論考に示唆をうけた―― Kichirô KAJINO, *La création chez Stendhal et chez Prosper Mérimée. Du Romantisme à la première Création romanesque*, Tokyo : Jiritsu-Shobô, 1980, pp. 343-351.

42) STENDHAL, *Lucien Leuwen*, op. cit., p. 1575.

43)「性格」と「情熱」にかんするスタンダールの理解と表現については，松原雅典『スタンダールの小説世界』，みすず書房，1999年2月，42-43頁を参照。

44)『アンリ・ブリュラールの生涯』にも同様の記述がある――「しかし，じっさいは親愛なる読者よ，わたしは自分がどんな人間なのかを知らないのだ」[II, 804]。

45) Voir Georges BLIN, *Stendhal et les problèmes de la personalité*, Paris : José Corti, 1958, pp. 6-7 ; Philippe LEJEUNE, «Stendhal et les problèmes de l'autobiographie», in *Stendhal et les problèmes de l'autobiographie*, textes recueillis par V. DEL LITTO, Grenoble : Presses Universitaires de Grenoble, 1976, p. 30.

46) Voir DEL LITTO, «Préface», in *Œuvres intimes*, op. cit., tome I, pp. XXXI et XXXV.

47) スタンダールの感覚・感受性を基礎におく自伝の方法については中川前掲書，129-138頁を参照。

48)「じっさい，3人称をつかって，彼はした，彼は言った，と書くこともできよう。そうだ，しかし魂の内部の動きをどうして伝えるのか」[II, 534]。